

ツンドラにトナカイを追う

—カムチャツカの遊牧民コリヤーク—

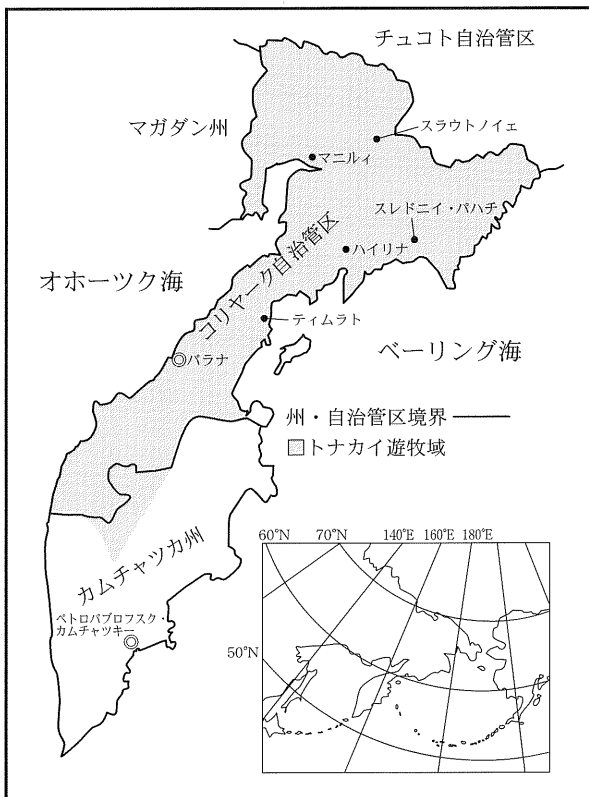
おおしま みのる
大島 稔 (小樽商科大学教授)

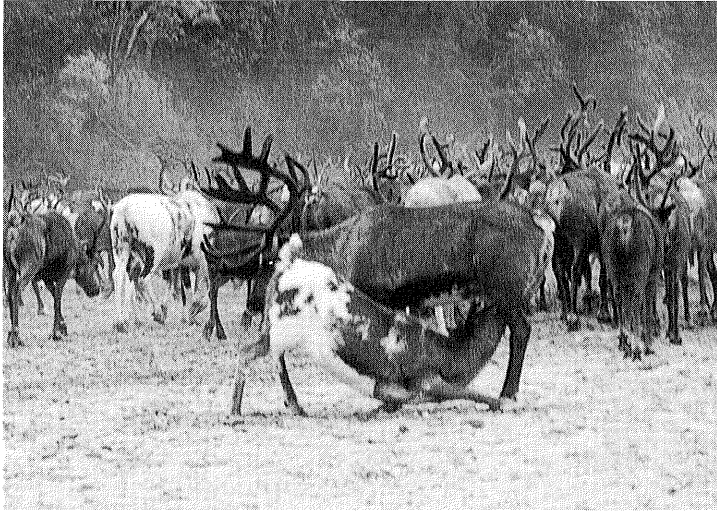
はじめに

ツンドラ（永久凍土）で長年にわたるトナカイ遊牧を生業としてきたコリヤークは、現在でもトナカイ遊牧を自民族の主要な生業と考えている。そもそもコリヤークという民族名の由来は、十七世紀にカムチャツカに進出したきたコサック兵が何度も耳にしたコーラク（gorak、コリヤーク語で「トナカイの・そばで」の意）という語であるといわれている。コリヤークは、内陸に居住し、陸獣狩猟や漁労、植物採集の他に経済活動の中心を大規模トナカイ遊牧に置くチャウチュワンと、オホーツク海

とベーリング海沿岸及び河川域に居住し、漁労・海獣猟・陸獣猟・採集を経済活動の中心として小規模トナカイ遊牧をも行う海岸に定住のヌムランに分けられる。掲載する地図は、二〇〇〇年現在のソフホーズ（国营農場）ある

いは企業体がトナカイ遊牧を行う地域を示したものである。この地図は、一九三〇年代のソビエト化、一九八〇年代後半に始まるペレストロイカと引き続く旧ソ連体制の崩壊によって大きな変化をこうむった後の現在のコリヤークのトナカイ遊牧域である。北シベリアに広がるトナカイ遊牧民の中でも、コリヤークは、ツンドラでトナカイの遊牧を行う。生業形態として牧畜に含められるが、他のトナカイ牧畜を行う民族と比較した場合、トナカイを杭につないだり、柵に入れて囲うこともしない、乳を利用することもない。橇そりの牽引にトナカイを使うが、騎乗はしな





い。荷駄用としての利用もわずかで牧畜といえないような飼育形態である。野生に近い形で、餌を求めて移動するトナカイに合わせるように人間も移動しながらトナカイを飼育するという点で、まさに遊牧の典型と言えよう。

トナカイの出産と去勢

トナカイを屠殺して肉や毛皮を利用するので、コリヤークにとってトナカイの繁殖は大切である。トナカイの出

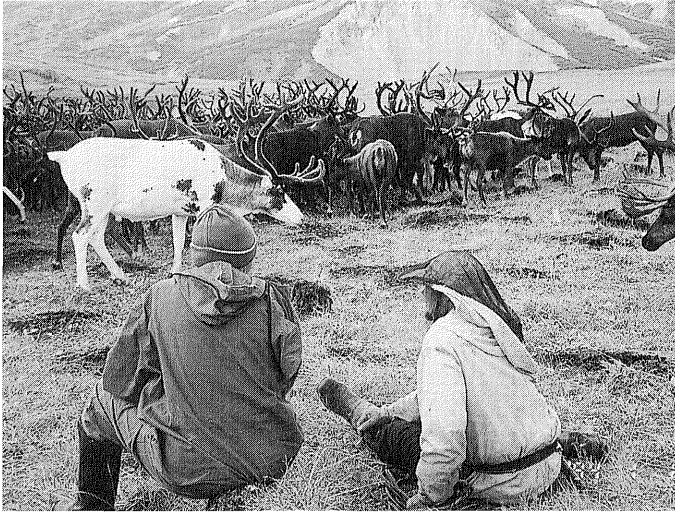
産は四月頃で、出産が近づくと、牧夫頭は、キャンプ地の近くに寒さと風から守られた出産に適する場所をさがす。オスの群からメスを分けて一ヶ所に集め、出産させる。

オスの去勢は、生殖可能になる一歳の春に始まる。成長が早いオスはこの時期に去勢されるが、成長が遅いオスは秋になってから去勢される。去勢によつてさらに成長が遅くなり、病気にもかかりやすくなるためだ。また、仔トナカイが小さくて虚弱だと冬の初めに脂肪がなくなって死んでしまう。健康な仔トナカイは毛色が黒くなるため外見で判断できる。母トナカイは、走り回ると乳の出が悪くなるため、走り回らないのが良いメスだとされる。雪が少し融けて乾いた場所ができると、草を食べようとトナカイの動きが激しくなり、母親と仔トナカイを一緒にしておくのがたいへんである。仔トナカイは、母親がいなくなると乾いた場所でぐるぐる回りながら、「コー、コー」と泣く。仔トナカイに乳を与えるように、なるべく母親を仔トナカイの近くにいさせるようにする。春の牧夫の大事な仕事は、オオカミ、キツネ、クズリ、ワタリガラスなどの捕食者から仔トナカイを守ることである。また、春

といっても寒い四月か五月には、仔トナカイに凍死の危険があるので、昼夜の別なく監視する。子供や老人も監視の仕事にかり出される。監視を強化してもこの時期の仔トナカイの死ぬ確率は高い。

トナカイの数が減少するのを防ぐために、屠殺するのは原則的に成獣のオス、若いオス、年老いたり不妊になったメスである。コリヤークのトナカイの場合、群の総数に対して妊娠可能なメスの数は、平均で約五〇％である。出生率が五〇％、当初のトナカイ数が三〇〇頭だったとすると、翌年には三七五頭となるので、一年間に七五頭を屠殺しても三〇〇頭の規模を維持できることになる。トナカイは、オスもメスも角を有するが、オスの方が枝角が大きくなる。春になるとトナカイはあばれることが多くなるので、枝角をつかむことは危険である。オスは十一月末に角が落ちる。去勢したオスと当歳仔、それに不妊のメスは四月に角が落ちる。妊娠したメスは、産後三日から十日で角が落ちる。五月から六月にかけて力の強くなったオスがメスを追いかけるようになると、オスのトナカイの去勢をする。オスが時にはメスを押しつぶしてしまうことがあるからだ。

夏の放牧地（ティムラト）



夏の放牧

コリヤークの伝統的去勢法は、辜丸こうがんにつながらる精管を歯で噛んで切り離す、出血しない無血法である。精子が辜丸に行かなくなると、オスはおとなしくなる。去勢後、辜丸が乾燥すると辜丸を引き抜くが、痛みはないらしい。

七月になると冬の放牧地から夏の放牧地へ移動する。七月初めから八月末か九月初めまで、この夏の放牧地でトナカイの群と過ごす。夏の遊牧地は、

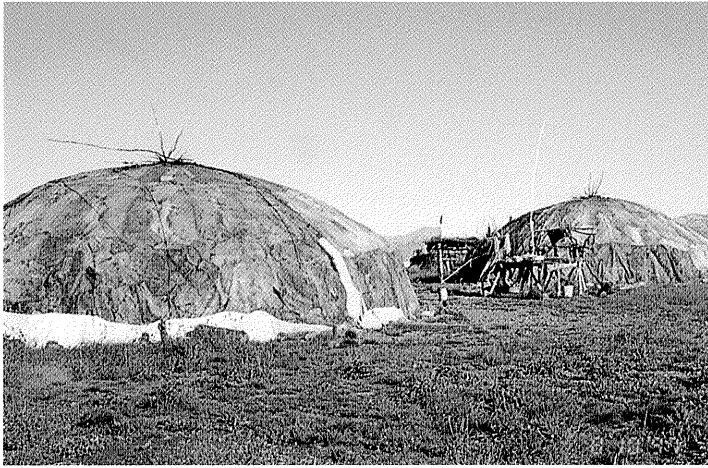
海の近くか山の高所である。どちらもトナカイにとって害虫となる蚊とブヨからトナカイを守るためである。夏には緑が多いのでたっぷりと草や白樺、柳、ポプラの木の葉、キノコをたべる。たくさん食べさせ栄養をたっぷり摂らせる。

夏に適宜水を飲ませないと、トナカイは水気の多いキノコを求めて四散してしまい、集めるのがたいへんである。だから、夏には、牧夫が適切に水を飲ませるようにしなければならぬ。トナカイは乾燥した暑い夏に弱い。トナカイは夏になると蚊に悩まされることもあって落ち着かない。四散してしまうのを防ぐために、夜も番をしなければならぬ。夏に一人、秋には二人の牧夫が、夜にトナカイを起こして食べさせたり、水を飲ませたりするために、あるいは寝て休ませるために、終夜番をする。夜でもトナカイ毛皮の服を着ていれば暖かいので、凍死することは少ない。夏の遊牧は、若者が中心だ。老人や妊婦は、夏に川で漁労に従事する。川の上流部でも、シロザケ、オシヨロコマ、ベニザケが遡上してくるので、箱罟わなや網を使って魚を捕る。これを干し魚にして犬の餌にする。冬期保存用の魚の準備をする。べ

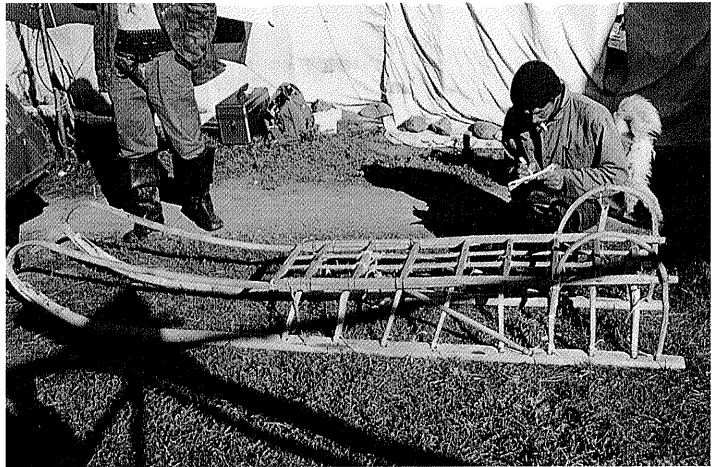


ぞり犬機用の犬は、夏はテントの支柱を運ぶ（ティムラト）

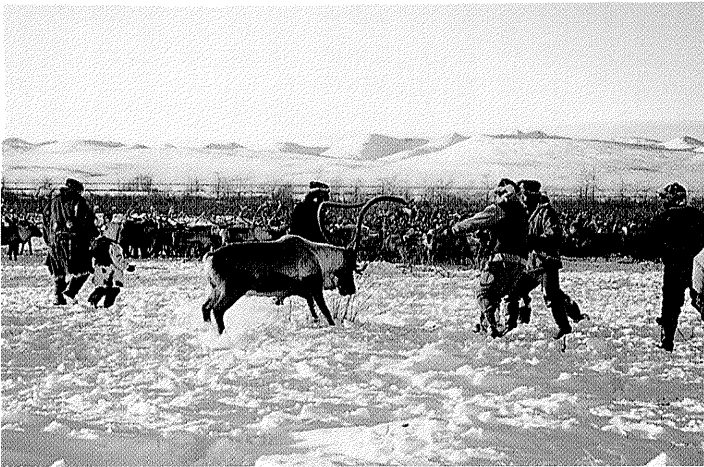
リーしよ（漿果）摘みも夏の大事な仕事だ。テントの支柱、橈などに使う木材を集めて乾燥させる。狩猟をする暇はないので、クマ、ホッキョクジリスや鳥などに偶然あえばそれを獲る程度だ。七月にトナカイの換毛が始まる。蹄にも毛がなくなるので、移動する時に、鋭角の石の上を歩かせないように注意しなければならない。八月には蹄に毛が生え、盛んに動き回るので、トナカイが四散しないように群をまとめるのが牧夫の重要な仕事となる。



トナカイ皮のテント住居（マニルイ）



トナカイゴリ櫓（ハイリナ）

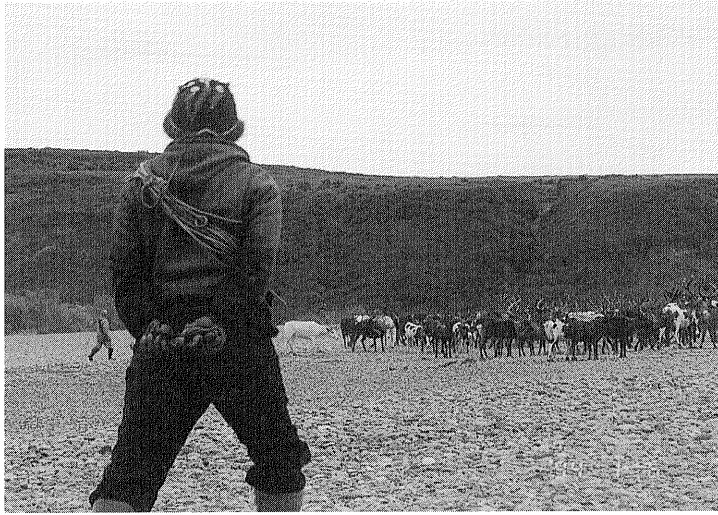


投げ縄でトナカイを捕らえる（スラウトノイエ）



トナカイの解体（スレドニイ・パハチ）

冬の放牧地への移動（スレドニイ・パハチ）



冬の放牧

秋（九月末か十月）になると、夏の放牧地から冬の放牧地へ移動する。

冬を越せないと判断された仔トナカイは屠殺する。仔トナカイの毛皮は柔らかくて、衣服の材料に適している。冬の前に衣服と橇の準備をする。どの年齢のトナカイの毛皮がどのくらい必要かを女性が判断する。年長の女性が衣服を用意する計画を立てて女性に割り当てる。テントの覆いの修理や、テン

ト内の各家族の部屋の仕切の修理もする。

秋の初めの時期は、雪が降ればよいが、雪が降らずに川が凍ってしまうのが、トナカイにとって一番たいへんである。水が飲めないからである。雪があれば、雪をたべて水分を取るからよい。そのため、冬の放牧地に移る前には、凍らない川の近くか、凍るのが遅い場所に連れて行く。初雪を合図に冬の放牧地へ移動する。冬は、捕食者のオオカミと吹雪からトナカイを守る。吹雪になってトナカイが離散してしまい、何百頭も失うことがあるので、吹雪の前には風をよけて、谷底などに移動させる。

トナカイの冬の餌は、トナカイ・ゴケとも呼ばれる地衣類だ。トナカイは、雪の下になったトナカイ・ゴケを臭いで見つけてたべる。ただし、トナカイ・ゴケは、上部のみを食べさせるようにしなければならない。上部のみ食べれば、トナカイ・ゴケは、三年もすれば再生するが、根元まで食べてしまうと再生に十年もかかってしまうからだ。トナカイ・ゴケがなくなるとすぐに移動する。トナカイ・ゴケを絶やさないと一ヶ所に長く留まらな

い。だから、冬は、キャンプの周りで

トナカイを放牧する場所をつぎつぎと変える。そしてキャンプ地の周囲のトナカイ・ゴケを食べ尽くすと、キャンプを移動させる。一ヶ所に十五日くらいとどまり、冬の放牧地内の他の場所にキャンプを移動する。

冬にキャンプから群のいる場所に行くのには、トナカイ橇を使う。橇を牽引するトナカイは、夜のあいだはキャンプ地につながれており、毎朝キャンプから群のいるところに向かう。冬のキャンプ地での移動は、二頭立てのトナカイ橇で行う。トナカイは心臓のある左側に牽引具が来るのをいやがるので、右肩に回して結ぶ。左右にからだトナカイは、左のトナカイの牽き綱が右のトナカイの右肩につながれた牽き綱だけが御者の手元に握られる。右のトナカイを操縦すると二頭とも操縦できる仕組みである。まず、住居と家族を移動させ、牧夫は、前のキャンプ地に戻り、トナカイの群を新しいキャンプ地の近くに連れてきて、移動が終わる。

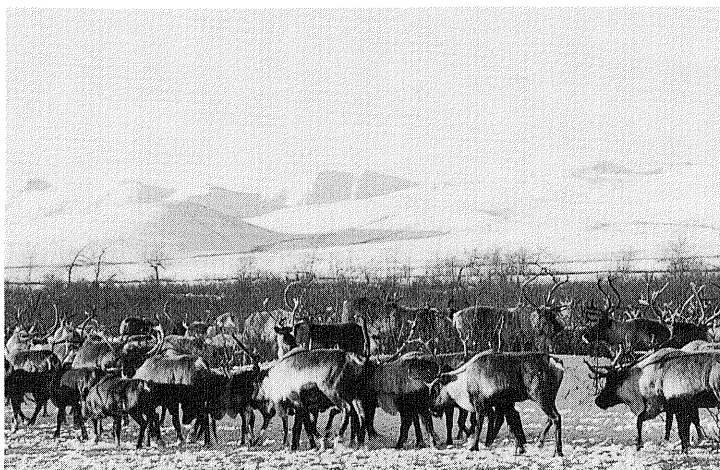
トナカイ橇には、競技用と運搬用がある。運搬用橇は、キャンプの移動などの短い距離の移動に使う。二頭牽きが多いが、荷物が重い場合には三頭牽

きもある。競技用橇は、儀礼の時に行うトナカイ橇競技用であるから、スピードが出るように運搬用橇よりも幅が狭く、軽く作ってある。メスを競技用橇トナカイにする。競技用トナカイにするため、秋に摂餌を制限し、身体の脂肪を少なくして橇の練習を開始する。

犬橇は、長距離の移動に用い、八頭牽きか十頭牽きで、夏のキャンプ地に保存してある干し魚などの食糧物資を冬のキャンプ地に輸送するため、あるいは他の居住地への移動に使った。

トナカイの利用

牧夫たちは、投げ縄をもってトナカイの群に入って行き、円を描くようにトナカイを走らせながら、捕らえるトナカイを話し合って決める。老齢や病気などで、冬を越せないようなトナカイを優先的に選ぶ。捕らえるトナカイが群から離れるように誘導し、小さな群に分けて、ねらったトナカイの角に投げ縄をかける。トナカイと綱引きになるが、数人で引き寄せて、角をつかんで、心臓にナイフを刺す。この時に大地に血をこぼさないように気をつける。血を流さぬようにトナカイの首の下のもで傷口に栓をすることがある。



冬の放牧地（スラウトノイエ）

血を流さないのは、トナカイと大地に示す敬意である。また、血を煮てスープにして飲むためでもある。皮を剥ぎ、腹腔を切り開き、内臓を取り出してつぎつぎと地面に置く。胃と腸は、地面に内容物を絞りだす。胸腔内に溜まった血を腸に入れて保存する。その後、角と頭骨を切り離し、内臓を腹腔に戻して毛皮を縛り付けて丸ごと運ぶ。地面に残るのは、わずかな血の跡と胃と腸の内容物のみである。

トナカイの肉も内臓もコリヤークに

とっては大事な食糧であるが、食糧をトナカイにのみ依存する事はなく、他の陸獣の肉、魚類、ベリー類を採集し、栽培野菜や店で購入した食品なども利用した。

毛皮はなめして、自家用の衣服、容器、荷駄袋、テント住居の覆いなど様々な生活用具を製作した。落ちた角は、伝統的には、橇、牽引具、投げ縄の部品やタバコ容れ、針入れ、スプーンなどの生活用具に細工して利用する。

おわりに

トナカイの生態を知り、ツンドラにトナカイを追って共生することは、コリヤークにとって衣食住を支える生活の基盤である。そのトナカイ遊牧が旧ソ連時代に産業化され、大規模飼育に変容した。さらにペレストロイカ以後の政治・経済の改革の中で、もはや基盤の産業ではなくなってしまったようだ。現在は、家族を養うための小規模なトナカイ遊牧に戻ったとも言える。私は、これまでトナカイ遊牧の歴史的变化を研究してきたが、トナカイ遊牧がコリヤークの伝統文化として若い世代に引き継がれて行くことを切望している。